

ヨーロッパ・アイデンティティ概念の理論的検討

An Theoretical Analysis on the notion of “European Identity”

文学研究科社会学専攻博士後期課程在学

吉 野 良 子

YOSHINO Ryoko

はじめに

1. アイデンティティ——その曖昧さと弾力性——
 - 1-1. “identity”をいかに訳すか
 - 1-2. エリクソンの定義
2. アイデンティティ概念の理論的検討
 - 2-1. 共時のおよび通時的時間と空間の交差する場所としての社会
 - 2-2. 個人と社会の弁証法
 - 2-3. 他者の内在化
 - 2-4. 包摂の論理
3. 「生—権力」としてのヨーロッパ・アイデンティティ
 - 3-1. アイデンティティ創造による統治基盤の安定化
 - 3-2. 「透きとおった重圧」によるアイデンティティ同定
 - 3-3. 忍び込まされた排除の論理

おわりに～ヨーロッパ・アイデンティティである意味～

はじめに

アイデンティティとは元来、心理学や精神分析の領域で用いられてきた概念であった。近年では、「アイデンティティ・ポリティクス」などの使用法に代表されるように、国際関係論や政治学、社会学あるいは国際社会学といった分野においても多用されている¹。しかしながら、そうした使用法のなかには「アイデンティティの固定化への固執」²に陥っているだけでなく、アイデンティティのある一

面を強調することによって、もう1つの側面を過小評価しているように思われるものも管見される。

「アイデンティティ・ポリティクス」という術語で表現されるところの政治とは、承認をめぐる政治の謂いであるが、この枠組においては、その種の政治闘争を経ることによって新たなアイデンティティが構築されるという側面が見落とされやすい。その結果、アイデンティティの可変性および重層性という特質に十分な注意が向けられないままになる危険性を孕んでいる。加えて、その排他性があまりに自明視あるいは強調されてきたこともまた指摘しておかなければならないだろう。

それに対し、筆者は包摂の論理こそアイデンティティ概念の中心的機能であると考えている。問題は、包摂の論理であるにもかかわらず、排除の論理として消費される構造であろう。その構造をこそ解明しなければならないのではないだろうか。それは必然的にアイデンティティと権力の関係性に再検討を求めるものとなるであろう。

したがって本稿ではまず、エリクソンが賢明にも採用したようにその定義的説明は試みない。その代わりアイデンティティがいかにか構築されるのかを理論的に検証する。こうした方法を採用することで、しばしば陥りがちな論点拡散を回避し、アイデンティティ概念が有する特質を理解する一助となりうるのではないだろうか。そうした理論的検証のうえに、「集团的アイデンティティ」として消費されるヨーロッパ・アイデンティティが、政治的資源として利用され、権力装置の役割を果たしているという仮説を展開し、EUが自らに冠したアイデンティティの意味と機能を検討する³。

1. アイデンティティ——その曖昧さと弾力性

1-1. 《identity》をいかに訳すか

identityとは同一を意味するラテン語のidentidemをその語源にもつ。学術における最初の使用はフロイトの精神分析⁴とG. H.ミードのアイデンティフィケーション理論であった。用語の一般化に寄与したのは「アイデンティティの危機 (Identity Crisis)」としてそれを理論化したエリクソンである。

ではidentityとは何か。この問いに答えることは容易ではない。identityが日本のアカデミズムの世界にもたらされて以後、この訳語をめぐる一種の混乱した状況がそのことを物語っている。心理学では「同一性」、社会学では「存在証明」、哲学では「主体性」、ナショナリズム研究においては「帰属意識」と訳されるなど、学問領域によって異なる訳語が付与されてきた。こうした状況を概念の曖昧さゆえと容認し、文脈によって使い分けるべきとする見解もある⁵。

しかるに、訳し分けるという解決法には問題点も存在するだろう。「同一性」や「帰属意識」はある

対象に自我を溶解させるといったイメージを喚起させる。つまり、「他者」を想定している。それに対して、「存在証明」や「主体性」は、私とは誰かという問いに対する回答であろう。つまり、「自己」を明確化させる概念と言える。しかしながら、後述するように、identity概念はその両者を同時に内包するものである。概念が持つ可変性・柔軟性・相互性を無視し、あたかも固定的で不変的な枠組みであるかのように扱うことは、アイデンティティ概念の不正確な用法であると言わざるを得ない。また、identity概念が個の存在を社会の構成要素として重視する思想をもつヨーロッパ世界から誕生したことも偶然ではないだろう。

したがって、本来ならばこうした複雑性を表現しうるより適切な訳語を用いることが望ましいのであろうが、近年の多くの研究でidentityをアイデンティティとそのまま記すことが慣例となっていることも鑑み、本稿でもアイデンティティという表記を用いることとする。

1-2. エリクソンの定義

エリクソンは、その論考「自我アイデンティティという問題」⁶のなかでアイデンティティ概念を次の3点に要約して説明した。第一に、それは自分自身のなかに一貫して保たれている斉一性であり、第二に、ある種の本質的性格を他者と永続的に共有することであり、第三に、これら両者の相互関係をも同時に意味する概念である。第一の説明が前述の「主体性」など「自己」を明確化させる概念の担保となるものであるのに対し、第二のそれは「帰属意識」などある対象に自我を溶け込ませるイメージの担保となるものであろう。そのどちらかに偏る理解が不正確であるとする理由は、それらの語義にエリクソンの指摘するところの第三の観点が欠落しているからである。

と同時に、エリクソンは「この主題について書けば書くほど、この言葉は総括的で不可解な何物かをさす術語になってしまう」⁷として、アイデンティティ概念の定義的説明を拒否してもいる。というのも、アイデンティティ概念はその本質上、「変転きわまりない歴史的状況によって変わらざるを得ない」⁸類のものであり、全体像を捨象してしまった意味で使用するならば、その「悪魔的 (sinister) で活発な」⁹側面が失われ、「何か他の名称で呼んでもよいような」¹⁰ものになってしまうからである。

このように、エリクソンはその曖昧さを軸としてアイデンティティ概念を叙述した。そのため彼自身指摘するように、概念の拡大解釈を可能とし、「儀式化」された様式で用いられ、多義化という状況を生みだした。現実の問題を明らかにするどころか逆に隠蔽している、との批判も多くなされてきたのはこのためである¹¹。

しかしながら栗原によれば、それは曖昧さを内包するがゆえに「脱領域的な用法を可能」とし、「意識と歴史・社会との力動的関係」の解明に資するものである¹²。まさにブルームが指摘するように、「進化する輪郭 (evolving configuration)」¹³として、エリクソンはアイデンティティを描いたのである。それゆえに、「構造ではなく動態的過程」¹⁴として、また「断片的な諸々の〈同一視〉 (identification)

の合計以上の…生涯続く発達」¹⁵として、理解されるべき概念であると言えよう。草津はこのようなアイデンティティ概念を操作概念というよりもむしろ、感受性喚起概念 (sensitizing concept) として位置づけた (以上、傍点筆者)¹⁶。では、このようなアイデンティティが形成される過程にはいかなる変数が媒介し、どのような関係性のなかで構築されるのであろうか。

2. アイデンティティ概念の理論的検討

2-1. 共時的および通時的時間と空間の交差する場所としての社会

馬場の『アイデンティティの国際政治学』によれば、アイデンティティ形成には「神なき人間」が神のかわりに歴史に自己を位置づけ、その存在理由の確証を得ようとすると同時に、時間的に限定された自己を超越して歴史の永遠性に帰依しようとする「精神作用」が必要とされる¹⁷。ヨーロッパにおけるアイデンティティの「相互文化性 (interculturalité)」を論じたレイによれば、アイデンティティとは、多様な関係性のただなかで諸々の交渉をもとに形成される1つの過程であり、通時的時間のみならず、共時的時間においても相互作用的に構築されるものであるがゆえに、アイデンティティ形成過程におけるダイナミズム——血縁やネーションといった「歴史的データ」にのみ基づかない、共時的時間という生そのものが織りなす関係性——をこそ検証しなければならないものとされる¹⁸。

アッピアが自身のアイデンティティを宗教や社会、学校、国家そして家族という媒介変数を經由することで経験的に獲得されるものとして語ったのは¹⁹、馬場とレイの指摘の具体化であろう。すなわち、水平的空間としての生活世界のなかで、通時的時間に関する諸要素が組み込まれている様態、およびそれらがアイデンティティ形成にいかに関与しているかについての具体的説明である。歴史という通時的時間軸は共時的時間軸のなかに埋め込まれており、そのような共時的時間軸のなかに生そのものが位置づけなおされる。そうしたダイナミックな過程を通じて、「生そのものが織りなす関係性」のなかでアイデンティティは形成されるのである。

しかるに、そうした時間軸が存在するためには、それが展開される〈場〉を必要とすることは自明の理であろう。アイデンティティの形成過程を考察する際、共時的・通時的な時間とともにその両方にまたがる空間を考慮することが重要である。情報化社会の登場が指摘される昨今、インターネット上の仮想空間をも含めた空間軸を設定する必要があるだろう。リアルであれバーチャルであれ、生きた個人がコミットしているという限りにおいて、そうした仮想空間はリアルな時空間軸に組み込まれるべきものである。それは、歴史という過ぎ去ってしまった時間が眼前には存在しえず、戻ることもしかないという意味において、バーチャルな時間であることと同じなのではないだろうか。つまり、

インターネット上の仮想空間をも含めた生が生きられる空間軸を設定することが求められているのである。このようなアイデンティティと時間と空間の三者関係は、ハンドラーが指摘した「時間と空間に縛られたアイデンティティ」²⁰という理解ともある部分においては通底するが、少なくとも、リアルな空間である領土に縛られるものとしてアイデンティティを理解することがもはや困難である時代状況が進行していると言えよう。

その時間軸と空間軸が交差する地点こそ、社会という場に他ならない。

・グローバリゼーション

21世紀の世界において、このアイデンティティと時間と空間との三者関係はグローバリゼーションを考慮せずしては構築不可能となりつつある。

スコットは、「まるで『領土という概念を超越した』面にもいるかのように、今日のグローバル化した世界において人びとは、自らのいる緯度と経度に関わりなく、他の人とさまざまな意味でつながることができる」²¹と述べ、グローバリゼーションが人間の結びつきを増大させる側面を指摘した。またブリュンは、「距離はほとんど意味をなくし、方向はいつそう意味をなさなくなってきた。小さく結びつけられ、統合された世界においては、絶対的位置よりも相対的位置の方がより一層重要なのである」²²とし、交通・通信技術の飛躍的な発達で領域や距離の質の変化を余儀なくさせている点を強調した。科学技術の更なる発展と普及という今日の状況は、歴史的過程であるグローバリゼーションを一層加速させ、「領土という概念を超越した」〈場〉の共同性を生みだしはじめていたのである。

しかしながらその一方で、そうしたグローバルな移動や、時間と空間を超越したコミュニケーションの機会から取りこぼされた人びとが未だ数多く存在することもまた事実である。米国商務省の調査によれば、2005年9月20日の世界総人口は6,467,656,928人であった²³。この内、約60%がアジアに、約13%がアフリカ大陸に居住している²⁴。2000年時における世界の未就学児童数、成人非識字率人口、1日1ドル以下で生活している人口の内、70%以上がいずれもサハラ以南アフリカとアジアに居住しているのである²⁵。そうした地域はいずれも、FAOが作成したハンガーマップに記される栄養不足人口と栄養不足度が「非常に高い」と分類されている地域と重なっている²⁶。こうした環境に生きることを余儀なくされている人々は、死を迎えるまで同じ場所に留め置かれる可能性が高く、越境行動をする時とは自らの意図に反した紛争や災害、経済苦によって難民にならざるをえない時であろう。多国籍企業を研究のテーマとするフーグヴェルトが適切にも指摘したように、1970年代半ばに多くの資金移動規制が撤廃されて以降、資本主義統合の深化という新たな局面が台頭し、それに伴い、サハラ以南のアフリカのような貧しい周辺地域は「置き去りにされている」のである²⁷。

それに対し、ヨーロッパはグローバリゼーションに組み込まれているだけでなく、それを促進させる側にいる²⁸。ユーロは今やグローバル経済の重要な要素となった。EU市民にとって多国籍企業あ

るいは国境を越えたM&A、越境する資本や製品、ビジネスマン、留学生、旅行者、移民などの国際移動といった諸現象はすでに生活世界における重要問題である。そこにおいて観察される現象とは、グローバルとナショナルという異次元の対立ではなく、「極端な移動性と時空間の圧縮」による両者の「相互作用とオーバーラップという力学」であり、「ローカル<ナショナル<グローバルといった空間的ヒエラルキー」の成立不可能性である²⁹。デリダとハーバマスが、合衆国に対抗しうる存在として、グローバリゼーションによって喚起された挑戦に関する術語として、ヨーロッパ・アイデンティティを定義したように³⁰、グローバリゼーションはヨーロッパ・アイデンティティを考察する上で外すことのできない変数なのである。アイデンティティ形成における「資源」をより広範囲から選び取ることが個人レベルにおいてさえも可能な状況が、ヨーロッパではすでにつねに存在しているのである。

サスキア・サッセンの世界都市および移民研究、ベンジャミン・バーバーの「マックワールド」³¹に代表されるように、グローバリゼーション研究の対象は先進諸国の文化・都市生活あるいは近代化という論点に集中している。こうした状況こそ、現在語られているグローバリゼーションがきわめて偏った現象であることを如実に物語っていると言えるだろう。グローバリゼーションは地球という惑星に起こった地球規模の現象であるにもかかわらず、個人の生きる場所や状況というア・プリオリな条件によってコミットの度合いが大きく異なるのである。世界の70%を超える人びとが見る世界とヨーロッパを中心に先進諸国に生きる人びとが見る世界とでは、必然的にその風景が異なるであろうことは想像に難くない。将来的に、この絶対的不均衡が改善される見通しは明るいものではない。ゆえにこの状況が改善され、先進国の住人だけでなくまさに地球上に生きる誰もがアイデンティティ形成の際にグローバリゼーションの影響を免れ得ない状態に至るまで、グローバリゼーションはアイデンティティ概念にとって重要な媒介変数とはなりえても独立変数とはなりえないと言わざるをえないのである。

2-2. 個人と社会の弁証法

ジョック・ヤングが「共同体が崩壊したまさにその時、アイデンティティは発明された」³²とややジョッキングに論じたように、共同体論で用いられてきた「共同体」をパウマンは「ゲマインシャフトではなく、熱心に追求されるが、獲得しがたい『アイデンティティ』の別名」と説明した³³。

個人は生まれくる家庭を選択することができない。言語や文化、歴史といった諸価値を統合する共同体が個人のアイデンティティ形成における所与の実在であるかのように見なされ、ネーションやエスニシティが「アイデンティティ概念の根幹をなすもの」³⁴と規定されてきたのは、このためである。

しかしながら、「原初的な側面の存在があるかのごとき振る舞いが行われ」³⁵するナショナリズム的状况においてさえも、アイデンティティ構築の過程には、主観的選択が必要不可欠のものとして機能している。バーガーは、アイデンティティと社会の関係を個人と社会の弁証法という力学を描き出す

ことによって説明した³⁶。草津は両者の関係を「社会と心理の弁証法がある総合を達成すること、つまり客観的に定義される現実と主観的に維持される現実とが媒介・統合され、後者が前者によってその妥当性を証明される」³⁷ことと述べた。換言すれば、アイデンティティの獲得とは、個人にとっての「社会的世界の主観的獲得」³⁸に他ならないのである。

目に見えず、追求すれども「獲得しがたい」と形容されるアイデンティティ分析のためには、ミルズが唱えた「社会学的想像力」をもって「個人生活史と歴史、および社会構造内におけるそれらの相互浸透を考察の対象とする」³⁹ことこそが必要とされよう。なぜなら、アイデンティティは社会化の過程によって形成され、その過程は社会構造によって規定される一方、アイデンティティが社会構造そのものを維持・修正し、時につくりかえるという側面も存在するからである。つまり、「社会か個人か」という一方的選択でも両者を妥協的に結びつけることでもなく、社会と個人が相互に活性化する過程を描き出す⁴⁰ことがその研究目的に据えられる必要がある。

2-3. 他者の内在化

このように個人と社会の弁証法の結果として構築されるアイデンティティは、必然的に他者を内在化させたものとなる。アイデンティティ形成に〈鏡〉としての他者を必要とすることは、これまでさまざまな研究者によって指摘されてきたところである。たとえば、ストーンは「宣言」と「位置づけ」の一致という概念を用いてこれを説明した。

彼が他者に**宣言する** (announce) ことにより自分自身に帰属させるアイデンティティの言葉と同じ言葉を他者が彼に帰属せしめ、それによって彼をある社会的対象として**位置づける** (place) 時、彼のアイデンティティは定立されている。アイデンティティが自己にとりある意味を有するのは、位置づけることと宣言することが一致する時である。…アイデンティティを持つということは…社会関係に入り込むこととそれから離脱していくことを同時に遂行することである。⁴¹

「宣言と位置づけの一致」は名和が明らかにした「名乗り」と「名づけ」の関係⁴²、すなわち、自己提示である「宣言」と他者承認である「位置づけ」の絶え間ない往復作業の結果として生じるものである。だが、その一方で、「社会的相互作用」とともに、それに参加する個人の内に発生する「個人内葛藤」をも考察の対象とすることが求められる⁴³。「宣言する」ことを可能ならしめるには「思惟する」ことが必要だが、それを可能ならしめるには「対話」が必要である。そしてその対話が内面においてなされるものであるならば、必然的に、もう1つの他者を必要とすることになるだろう。

もう1つの他者とは、自己と異なる身体をもった「他者」ではない。G. H.ミードが「客我 (me)」と規定したところの内なる他者の存在である。つまり、2つの他者性がそこにある。ミードによれば、

「他者に意識的に対峙する (stand over) 自我は…自分が話すことを自分で聞き、自分がそれに対して答えるという事実、まさにこの事実によって自分自身にとって1つの対象、ひとりの他者になる」⁴⁴ ことができる。というのも、「人が自分自身に対して、対象ではなく主体となるのは、他者に対して働きかけるのと同じように自分自身に対して働きかけるような自分を意識したときのみ」⁴⁵だからである。

つまり、もう1つの他者とは「内省的自我 (reflective self)」⁴⁶を意味している。このような「内省のメカニズム」は、ミードによれば「一般化された他者 (generalized other)」の観点から行われるものである⁴⁷。「一般化された他者」には、社会的期待と規範の総体そしてコミュニティ全体の態度が投射される。その投影像が言葉あるいは有意義な身振りによる個人と彼自身との内なる会話を成立可能にするのである。そうした会話を通じてなされる内省は、つねに葛藤を内含するがゆえに、「二律背反を通じて構築」⁴⁸されざるをえない。アイデンティティをもつ個人が成長と変化を続ける限り、すなわち個人が社会のなかで生を営む限り、そうした作業は続けられるだろう。この意味において、アイデンティティはつねに再生産の途上にあり、何らかの実体ではなく、きわめて「社会的な行為」⁴⁹の所産に他ならない。別言すれば、アイデンティティ概念にはその構築の重要な過程に他者の包摂が必然的に組み込まれているのである。

2-4. 包摂の論理

個人におけるアイデンティティ形成のこのメカニズムは、アイデンティファイする対象がジェンダーであれ、宗教であれ、国家であれ、ヨーロッパであれ、基本的には同じ構造を観察できるだろう。そうであるがゆえに、アイデンティティの複数性を確保することが可能となるはずである。逆説的に言えば、アイデンティティの複数性、柔軟性、可変性、多義性が説明される状況こそが、アイデンティティが包摂の論理を内在化させた概念であることを証明しているのである。

もしアイデンティティが排除の論理、つまりナショナリズムのようなゼロ・サム関係に依拠するものであるならば、複数の対象を自己の内に取り込むことを可能とする「重層的」なものにはなりえないだろう。異質を排除するという性質は「固定化」と親和性が高い。アイデンティティを固定化して捉えてしまう誤りと排除の論理という文脈においてアイデンティティを語る誤りとは、実は同じ根をもつ認識論的誤謬ではないだろうか。

以上の論考から導きうることは、アイデンティティとは第一義的に、「私」はどのような世界に生きているのかという問いに対する回答である。自らを位置づけ、それを他者に宣言すると同時に他者に承認されることを必要とする相互行為から導きだされる回答である。「私」はつねに他者からの眼差しによって規定され、構築されるものである以上、ホールが指摘する通り、「過程として、物語として、言説として、アイデンティティとは常に他者の位置から語られるもの」であり、「他者の凝視の中に刻み込まれたものとしての自己」なのである⁵⁰。アイデンティティ概念それ自体は排除の論理を含むものではなく、むしろ、他者を一般化された他者として自己の内に取り込む過程を経てはじめて形成されるものなのであろう。そうして取り込まれた他者は、異物として残るのではなく、消化・吸収され新たな「私」を産み出す源泉となる。と同時に、他者は包摂の過程のなかで自己の認識というフィルターを通してしか取り込まれ得ないという意味において、ある程度変質してもいる。また、消化不良を起こした場合でさえ、内なる他者として自己に従属する関係性のなかに付置されるのである。

この一連の過程は、ウマ・ナラヤンが「文化を食べる——インド料理をめぐる食文化の取り込みとアイデンティティ」のなかで描き出して見せた、英国におけるカレーの成立過程と興味深い類似を示している⁵¹。ナラヤンによれば、インド料理の定番とされるカレーは、実は植民地宗主国である英国によって「捏造」されたインド像の取り込みの結果「組み立てられた」料理であった。ズロトニックの言葉を借りながら、ナラヤンは「英国が英国料理にカレーを取り込んだ際、英国人は自己のうちに他者を、ただし、自己の言葉でもって、取り込んだのである。…それはインド自体が大英帝国へと包摂されたあり方と、さして異なるものではなかった。…英国にとっては、カレーを食べることはある意味でインドを食べることであった」⁵²として、食べるという行為が支配という行為へと昇華される

構造を指摘した。まさにアイデンティティが包摂の論理に基づいていることを象徴する事例と言えよう。

こうしたさまざまな「他者」の間で交わされる不断の相互作用という開かれた関係性のなかで、他者性を内在化させる一連の行為こそ、本稿が述べるところの包摂の論理と呼びうるアイデンティティ形成の根幹となるメカニズムなのである。

ではなぜ、このような包摂の論理を軸とするはずのアイデンティティがポリティクス化され、排除の論理へのすり替えが行われているのだろうか。この問題について次節でヨーロッパ・アイデンティティを事例に考察を進めてみたい。

3. 生一権力としてのヨーロッパ・アイデンティティ

3-1. アイデンティティによる統治基盤の安定化

社会的行為の所産であるアイデンティティは、人間の自己認識の領域に密接に結びつけられている。それゆえに、人民主権と民主主義をその社会的基盤とする社会や国家はその構成員である諸個人がどのようなアイデンティティを持っているかに無関心ではいられない。なぜなら、人民主権と民主主義の母体をなす市民が、その社会なり国家なりを「社会的世界」として「主観的に獲得」し、自己の内に取り込まない限り、そうした政治的制度は機能するための正統性を確保しえないからである。このアイデンティティと統治の正統性についての関係性は、未だ国家という形態には至っていないEUにとっても同じであろう。

また、かつて国家は「世界」と「私」という両極の仲介役としての機能を果たしてきた。しかしながら、個人が世界と接続するために国家を仲介する必要性が次第に低下するに伴い、アイデンティティ形成における国家の役割もその重要性を低下させつつあるのではないだろうか。このような時代状況は、逆説的に、国家に代表される政治主体をしてアイデンティティ形成を重要な権力の源泉の1つとして行使せしめる余地を生みだしているとも考えられるだろう。

こうして、集団としての国家の存続を第一の目的に据える権力者側が自己保存のために、本来〈個〉の領域の問題であるはずのアイデンティティに介入するという事態が発生する。EUにおいても、1973年の「ヨーロッパ・アイデンティティに関する宣言 (Declaration on European Identity)」⁵³のなかでEC自身がその構築の必要性を初めて提唱するに至る。以後、「宣言」で提起された文脈の延長線上にEUは諸々の政策を施行してきた。すなわち、ヨーロッパ・アイデンティティは、人為的に産出された、あるいは「再発見」により新たな意味を付与された言説なのである。

3-2. 「透きとおった重圧」によるアイデンティティ同定

ゴフマンは、大規模な非人稱的組織体、すなわち国家による個人的アイデンティティ同定が行われていることについて以下のように論じた。

今日では、交渉を持つ個々人全部のアイデンティティを、積極的に同定できるような手だてを公的に記録すること、すなわち個人を他の人びとから明瞭に識別する一組の標識が使用されることは、組織体の標準的な仕事になっている。…いろいろの工夫が重ねられている現在、予想されることは、国家による市民ひとりひとりの個人的アイデンティティ同定 (identification) はますます徹底するだろう。⁵⁴

アイデンティティ同定のための手段として、たとえば、出生証明やコンピューター解析による話声・筆跡確定、社会保障登録番号などが挙げられる。9.11以降はセキュリティの重要性が喫緊の課題として設定され、生体認証技術の向上とも相まって、指紋や虹彩、声紋による認証システムが開発され、需要を伸ばしてもいる⁵⁵。

これらの手段はすでに私たちの生活世界に制度として組み込まれて始めている。EUにおいても市民の生活世界に自らの存在が浸透するような諸制度がシンボルとして導入されている。たとえば、EU市民権の創設やユーロの流通をはじめとして、衛星放送やケーブルテレビによる「ヨーロッパ視聴覚空間 (European audiovisual space)」の構築、共通ニュース番組EuroNewsの放送、シェンゲン協定による「国境」の共有化と域内自由移動を可能とする共通パスポートの創設、憲法条約のための国民投票の実施などは有名な事例である。しかし、ヨーロッパ・アイデンティティ・カードの導入が検討されていることは、まだあまり知られていないのではないだろうか。イタリア選出のヨーロッパ議会議院G. ピッテラはEU市民の身分証明に使用できる証明書がナショナル・アイデンティティ・カードかパスポートしかないことを指摘し、ヨーロッパ・アイデンティティ・カード導入の必要性に関する質問を2002年議会に提出している⁵⁶。

仮に、ヨーロッパあるいはEUというシンボルを組み込むことを容易にするような、あるいは無意識のうちに組み込まざるをえないような社会状況が存在するならば、人間の内奥深く語られる内的会話による自我形成の過程でそうしたシンボルは大きな影響を及ぼしうる。ミードは言う。

他者に意識的に対峙する (stand over) 自我は、したがって、自分が話すことを自分で聞き、自分がそれに対して答えるという事実、まさにこの事実によって、自分自身にとって1つの対象、一人の他者になる。それ故、内省のメカニズムは、人が自分に対して必然的にとる社会的態度のうちに存在することになる。そして、思考のメカニズムは、思考が社会的相互作用にお

いて用いられるシンボルを用いるかぎり、内的会話（inner conversation）にほかならないものとなる。⁵⁷

諸制度を通した国家によるアイデンティティ同定が可能となるのはこのためである。そしてこのような環境はすでにEUによって整備されているのである。

こうした諸制度こそEUによるアイデンティティ同定のための手段に他ならない。制度や法は政治権力によって構成され「自然」に組み込まれる。自然に、とは、それらが市民にとって抑圧的と感じられないような巧妙な方法で導入され、実施されるからである。それどころか、民主主義という制度の下ではそういった制度はむしろ社会契約を背景に選挙を通じて主権者たる国民からの「正当なる」支持を得て成立されたものだというロジックが存在する。その結果、時として「主体的選択」であるかのような錯覚を帯びながら⁵⁸、個人の身体のみならずその精神の領域であるアイデンティティに一定の型が徐々に刻印されていく。この意味において、ルークスの指摘する「諸制度のかもしれない透きとおった重圧」⁵⁹という状況がEUという政治空間にはすでにつねに存在しているのである。まさにそれは、アルチュセールが「誰も表面的にはイデオロギーの拘束を受けていないと思込んでいるだけなのだ」とその無意識性を暴き出したイデオロギー装置であり⁶⁰、フーコーが明らかにしたところの「規律」的権力であり⁶¹、フーコーが理論化しネグリが発展させた「生-権力」⁶²なのである。

3-3. 忍び込まされた排除の論理

ここにおいて、各ネーションがナショナル・アイデンティティを形成することを至上命題と位置づけたように、EUがヨーロッパ・アイデンティティを「上」から提起した理由が明らかとなっただろう。バーガーによれば、「〈集団的アイデンティティ〉について語ることは、それが誤った（そして物象化された）実体化を生み出す危険性があるだけに、奨励するわけにはいかない」⁶³。社会的アイデンティティの構成を「権力の作用」⁶⁴と位置づけたのはラクローであるが、集団的アイデンティティとしてのヨーロッパ・アイデンティティも、本来曖昧であるはずの集合としての社会という外延に境界線を引くがゆえに、きわめて政治的かつ権力的な装置となりうるのである。人びとの間にあたかも固定された境界線を実体化させる「危険性」、すなわち、排除の論理への巧妙なすり替えというわながそこには潜んでいるのである。

他者性を包摂し内在化させることではじめて成立しうるアイデンティティが排除の論理として消費されるのは、このようにアイデンティティ形成過程に権力が介入するからである。その過程で他者性の包摂は顧みられることなく、異質な他者という側面のみが強調されることとなる⁶⁵。こうして20世紀後半に〈再発見〉⁶⁶されることになるヨーロッパ・アイデンティティは、最初からポリティクス化されていたと言っても過言ではないだろう。今やアイデンティティは、かつてロストウが「ネーショ

ンは政治理論のキー概念であるだけでなく、政治論争の最も好まれる武器となった」⁶⁷と国民統合に寄与したネーション概念について論じたような状況に陥ってしまったのである。

このように、現実の世界でアイデンティティが排除の論理として立ち現れるのは、アイデンティティ概念を用いることによって、人びとの意識を自発的に自らと結びつけることが可能になるからである。シャルルマーニュはその支配を安定させ権威を確立させるために、個人の内面に直接影響を及ぼしうる「告白」という機能をもつキリスト教をその統治原理として導入した。EUは今や新たな「告白」機能、すなわち「宣言」と「他者承認」という相互作用を内在化させたアイデンティティをもって、個人の内面に直接介入しはじめたと言えるのではないだろうか。一連のメカニズムと関係性と機能を正しく把握するならば、ヨーロッパ・アイデンティティ構築を通して、EUは無意識の支配を確立し統治の安定化を図ろうとしているとも言えるだろう⁶⁸。

多くの歴史上の人物が証明するように、精神は誰にも支配しえないものである。アイデンティティもまた身体的強制力では完全なる支配が困難な領域である。しかしながら、大多数の人びとはさまざまな装置により、アイデンティティをあたかも自らが選択したかのような「錯覚」で満足させられているかもしれないのである。ヨーロッパ・アイデンティティを取り巻くこうした権力関係を考慮しないならば、あるいはそれに無自覚であるならば、権力による言説を分析する機会を逸してしまうだけでなく、研究者自身がEUのイデオログへと墮し、ヨーロッパをめぐるアイデンティティ・ポリティクスに巻き込まれてしまう危険性を犯すことになるであろう。

おわりに～ヨーロッパ・アイデンティティである意味～

ではなぜ、EUは自らの名を冠した「EUアイデンティティ」ではなく、ヨーロッパ・アイデンティティを提起したのだろうか。ここには重大な意味が潜んでいる。

地理的ヨーロッパの境界線はこれまでつねに曖昧であり続けた。地理的ヨーロッパという枠組と政治的ヨーロッパという枠組がこれまで一致したことはない。EUにはフランスやポルトガルの海外県が含まれ、ポーランドとリトアニアには含まれたロシアの飛び地、カリーニングラードも域内に存在する。EU自身、戦後の石炭鉄鋼共同体以降その境界線をつねに変化させてきた。2004年5月には25ヶ国へと拡大を遂げた⁶⁹。トルコやバルカン諸国なども加盟を申請している。2005年選挙によって政権交代を成し遂げたウクライナも加盟希望の意志を隠していない。つまり、境界線は可変的であり続けたし、今後も変化する可能性を否定できないのである。

それにもかかわらず、EUはアイデンティティを歴史的な概念であるヨーロッパと明確な境界線を有する政治的主体である自らとを結びつけた。ヨーロッパをして自らのアイデンティティを形容させるという選択には、自らに歴史を付与しその統治の正統性を確立させようとする政治的意図が隠されて

いると解釈することも可能であろう。こうした意図は、たとえばベルハーゲン拡大担当委員による「ヨーロッパは拡大するのか？そうではない。本来の自分を取り戻すのだ」⁷⁰との発言に象徴的に示されている。東方拡大はEUを〈歴史的ヨーロッパ〉とほぼ重なり合う広大な政治空間へと変貌させる可能性を秘めた前進と位置づけられ、説明されたのである。しかもそれは加盟を希望する諸国家の自発的意志によって成し遂げられた。この限りにおいて、新規加盟諸国は公式に自らのアイデンティティにヨーロッパを加えたと言っても過言ではない。と同時に、それはEU自身がそのヨーロッパ・アイデンティティに彼らを加えることを認めたことをも意味している。

それゆえに、拡大は改めて「ヨーロッパとは何か」との問いをEUとEU市民に投げかけるものとなったのではないだろうか。初期段階のヨーロッパ史研究は、ドーソンの『ヨーロッパの形成』⁷¹に代表されるように、西ヨーロッパを中心とするキリスト教研究であった。東側の「ヨーロッパ回帰」実現は、既存のヨーロッパ概念それ自体の問い直し作業をも迫るものとなった。「西洋をある意味で外国人の眼差しで見ること、自分自身の世界をまるで自分がその外部にいるかのようにして見るということが、わたしにできるのでしょうか。…言い換えればわたしは、アイデンティティとの関係において西洋を考察し、研究しようとしているわけです」⁷²とのルジャンドルの発言に象徴されるように、東方拡大はまさにヨーロッパをしてアイデンティティ探求の新たな過程に入らしめたと言っても過言ではないだろう。

¹ こうした状況については、大庭三枝「国際関係論におけるアイデンティティ」日本国際政治学会編『国際政治』第124号、2000年5月、137-162頁を参照されたい。

² 中谷猛「ナショナル・アイデンティティとは何か——問題整理への視角 概念・装置・言説」中谷他編『ナショナル・アイデンティティ論の現在——現代世界を読み解くために』晃洋書房、2003年、4頁。

³ 近年日本においてもヨーロッパ・アイデンティティ研究が開始された。たとえば、谷川稔編『歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ』山川出版社、2003年。しかしながら、同書でもアイデンティティおよびヨーロッパ・アイデンティティの理論的検討は行われていない。また同書以前の日本におけるヨーロッパ・アイデンティティ研究の多くはタイトルにその名を冠していたとしても、その内実は各国のナショナル・アイデンティティ研究の総合という性格の強いものであった。たとえば、樺山紘一・長尾龍一編『関連社会科学1・ヨーロッパのアイデンティティ』新世社、1993年。

⁴ フロイトは1915年に執筆した*Mourning and Melancholia*でアイデンティフィケーションという術語を初めて用いたが、アイデンティフィケーション概念をより中心的に論じたのはその6年後に執筆した*Group Psychology and the Analysis of the Ego*においてであった。同著でフロイトは結論として「アイデンティフィケーションとは対象にもつ感情的紐帯の原初的形態である」と論じた（Sigmund Freud, *Group Psychology and the Analysis of the Ego*, 1921, Vol. XVIII of the *Standard Edition of the Complete Works*, Hogarth Press, 1957, p. 107）。

⁵ 栗原彬『歴史とアイデンティティ——近代日本の心理＝歴史研究』新曜社、1982年、注29、13-14頁。

⁶ Erik H. Erikson, "The problem of ego identity," 1959 in *Identity and the life cycle*, Norton: New York, 1980（小此木啓吾訳編『[新装版] 自我同一性——アイデンティティとライフ・サイクル』誠信書房、1982年）。

⁷ Erik H. Erikson, *Identity: Youth and Crisis*, W. W. Norton & Company Inc.: New York, 1968, p. 9（岩瀬庸理訳『主体性＝アイデンティティ——青年と危機』北望社、1971年、i頁）。

⁸ *Ibid.*, p. 15（3頁）。

- ⁹ *Ibid.*, p. 16 (4頁) . なお、「悪魔的」との表現はエリクソンがアイデンティティの否定的性向を同様に重視したことを現していると考えられる。アイデンティティの宿す否定的側面あるいは「否定的アイデンティティ」については、*Ibid.*, pp. 20-22, p. 25 (11-14頁、19頁) を参照のこと。
- ¹⁰ *Ibid.*, p. 15 (3頁) .
- ¹¹ たとえば、N. Leites, *The New Ego*, Science-House, 1971 (草津攻「アイデンティティの社会学」『思想』1978年11月号、113頁参照) など。
- ¹² 栗原、前掲書、i頁。
- ¹³ William Bloom, *Personal Identity, National Identity and International Relations*, Cambridge University Press: Cambridge, 1990, p. 36.
- ¹⁴ ブルーノ・エチエンヌ「移住と民族の共生」高柳先男編『ヨーロッパ新秩序と民族問題』中央大学社会科学研究所、1998年、191-192頁。
- ¹⁵ 栗原、前掲書、13頁。
- ¹⁶ 草津攻「アイデンティティの社会学」『思想』1978年11月号、108-109頁。
- ¹⁷ 馬場伸也『アイデンティティの国際政治学』東京大学出版会、1980年、6-9頁。
- ¹⁸ Micheline Rey, *L'Europe en Bref: Identité Culturelles et Interculturalité en Europe*, Centre Européen de la Culture: Genève, 1997, p. 23.
- ¹⁹ アンソニー・アッピア「アイデンティティ、真正さ、文化の存続——多文化社会と社会的再生産」エイミー・ガットマン編 (佐々木毅他訳) 『マルチカルチュラルイズム』岩波書店、1997年、218-219頁。
- ²⁰ R. Handler, "Is 'identity' a useful cross-cultural concept?," John R. Gillis ed., *Commemorations: The Politics of National Identity*, Princeton University Press: Princeton, 1994, pp. 27-40.
- ²¹ Jan Art Scholte, "Beyond the buzzword: towards a critical theory of globalization," E. Kofman and G. Youngs eds., *Globalization: Theory and Practice*, Pinter: London, 1996, p. 45.
- ²² Stanley Brunn and Thomas R. Leinbach eds., *Collapsing Space and Time: Geographic Aspects of Communications and Information*, HarperCollins: London, 1991, p. xvii.
- ²³ U.S. Census Bureau, "World POPClock Projection," <http://www.census.gov/ipc/www/popclockworld.html> (2005年9月20日閲覧) .
- ²⁴ 総務省統計研修所編『世界の統計 2005』総務省統計局、2005年のデータをもとに算出。
- ²⁵ これらの数字については、以下の統計資料を参照されたい。UNESCO, *Education for All: Is the World on Track? Efa Global Monitoring Report 2002*, UNESCO, 2003. およびAlex Marshall ed., *The State of World Population 2002*, UNFPA: New York, 2003 (黒田俊夫監修『世界人口白書 2002——人々・貧困・ひろがる可能性～開発を貧しい人々のために』財団法人 家族計画国際協力財団、2003年) .
- ²⁶ FAO, <http://www.wfp.or.jp/index.php> (2005年7月14日閲覧) .
- ²⁷ Ankie Hoogvelt, *Globalization and the Postcolonial World: The New Political Economy of Development*, Macmillan: London, 1997. テッサ・モーリス＝スズキ「グローバリゼーションと新しい文化経済」テッサ・モーリス＝スズキ他編『グローバリゼーション・スタディーズ2 グローバリゼーションの文化政治』平凡社、2004年、89頁も参照した。
- ²⁸ たとえば、Roland Robertson and Kathleen E. White eds., *Globalization: Critical Concepts in Sociology*, Vol. I-VI, Routledge: London and New York, 2003. Marian Kempny and Aldona Jawlowska eds., *Identity in Transformation: Postmodernity, Postcommunism, and Globalization*, Praeger: London, 2002などを参照。
- ²⁹ サスキア・サッセン (鈴木淑美訳) 「グローバルとナショナルの間——経済学的グローバリゼーションの時空間性」『現代思想』2003年5月号、58-59頁、64頁。
- ³⁰ Geremek, Bronislaw, "Combattre l'«alter-européanisme»,» *Le Figaro*, 29 Juillet 2005, <http://www.lefigaro.fr/debats/20050729.FIG0113.html?074410> (2005年8月4日閲覧) .
- ³¹ Benjamin R. Barber, *Jihad vs. McWorld: How Globalism and Tribalism are Reshaping the World*, Random House: New York, 1995 (鈴木主悦訳『ジハード対マックワールド』三田出版会、1997年) .
- ³² Jock Young, *The exclusive society*, Sage: London, 1999, p. 164.
- ³³ Z. バウマン『リキッド・モダニティ——液化化する社会』大月書店、2001年、221頁。
- ³⁴ P. Nanton, "Official statistics and problems of inappropriate ethnic categorisation," *Policy and Politics*, 20, pp. 277-285. ブライアン・グレアム「アイデンティティの歴史地理——記憶の場所」ブライアン・グレアム他編『モダニティ

の歴史地理（上巻）』古今書院、2005年、93頁。

³⁵ 名和克郎「民族論の発展のために——民族の記述と分析に関する理論的考察」『民族学研究』第57巻3号、1992年12月、307頁。

³⁶ Peter L. Berger and Thomas Luckmann, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, Allen Lane: London, 1966, p. 194（山口節郎訳『現実の社会的構成——知識社会学論考』新曜社、2003年264-266頁）。

³⁷ 草津、前掲論文、127頁。

³⁸ Berger and Luckmann, *op. cit.*, p. 152（201頁）。

³⁹ Charles Wright Mills, *The sociological imagination*, Oxford University Press: New York, 1959, p. 143（鈴木広訳『社会的想像力』紀伊国屋書店、1995年、188頁）。

⁴⁰ 草津、前掲論文、140頁。ここで個人について草津は以下のような論考を加えている。「シンボリック水準での『表示』indicationを行い、また他の個体からの表示を解釈する生命体である。諸個人とその活動は、シンボリック相互作用の過程で時間的かつ空間的に関連しあい、集合体と『共同行為』joint actionをつくり上げる。」（109頁）

⁴¹ Gregory P. Stone, "Appearance and the Self," Arnold Marshall Rose ed., *Human Behavior and Social Processes: An Interactionist Approach*, Routledge & Kegan Paul: London, 1962, pp. 93-94.

⁴² 名和、前掲論文。

⁴³ 草津、前掲論文、110頁。

⁴⁴ George Herbert Mead, "The Social Self," 1913（船津衛他編訳『社会的自我』恒星社厚生閣、1991年、2-7頁）。

⁴⁵ "Ibid."（3-4頁）。

⁴⁶ "Ibid."（7頁）。

⁴⁷ George Herbert Mead, *Mind, Self and Society: from the standpoint of a social behaviorist*, University of Chicago Press: Chicago, Ill., 1934, pp.154-155（河村望訳『デューイ＝ミード著作集 第6巻 精神・自我・社会』人間の科学社、1995年、166頁）。

⁴⁸ Stuart Hall, "Old and New Identities, Old and New Ethnicities," A. D. King ed., *Culture, Globalization and the World-System: contemporary conditions for the representation of identity*, University of Minnesota Press: Minneapolis, 1997, p. 47（山中弘他訳『文化とグローバル化——現代社会とアイデンティティ表現』玉川大学出版会、1999年）。

⁴⁹ Bloom, *op. cit.*, p. 26.

⁵⁰ Hall, "op. cit.," pp. 48-49.

⁵¹ ウマ・ナラヤン（塩原良和訳）「文化を食べる——インド料理をめぐる食文化の取り込みとアイデンティティ」テッサ・モーリス＝スズキ他編『グローバリゼーション・スタディーズ2 グローバリゼーションの文化政治』平凡社、2004年、204-211頁。

⁵² 同上論文、208-209頁。

⁵³ Commission of the European Communities, "Declaration on European Identity," *Bulletin of the European Communities*, n° 12, December 1973, pp. 118-122.

⁵⁴ Erving Goffman, *STIGMA: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall: Englewood Cliffs, N.J., 1963, pp. 57-58（石黒毅訳『スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房、2001年、102-103頁）

⁵⁵ テッサ・モーリス＝スズキ（伊藤茂訳）「グローバリゼーションと新しい文化経済」テッサ・モーリス＝スズキ他編、前掲書、86-87頁。

⁵⁶ Written Question E-2278/02 by Giovanni Pittella (PSE) to Commission, Subject: European identity card, Ref: P5_QUE(2002)2278. ここでは一例としてPittellaの質問書を取り上げたが、1980年に最初に取り上げられて以来、複数の議員によって多数提出されている。

⁵⁷ Mead, "The Social Self,"（『社会的自我』8頁）。

⁵⁸ 権威と人間行動の関係性については、ハンス・アイゼンク、マイケル・アイゼンク（田村浩訳）『マインドウォッチング——人間行動学』新潮選書、1986年における論考は興味深い。

⁵⁹ Steven Lukes, *Power: A Radical View*, 2nd ed., Palgrave Macmillan: London, 2005 [1974]（中島吉弘訳『現代権力論批判』未来社、1995年、67頁）。

⁶⁰ Louis Althusser, "Idéologie et appareils idéologiques d'Etat," *La Pensée*, June 1970（西川長夫他訳『再生産について——イデオロギーと国家のイデオロギー装置』平凡社、2005年）。

⁶¹ Michel Foucault, *Histoire de la sexualité*, Gallimard: Paris, 1976（渡辺守章訳『性の歴史 I 知への意志』新潮社、1986

年) . なお、フーコーの権力観についてはたとえば以下を参照のこと。杉田敦『権力の系譜学——フーコー以後の政治理論に向けて』岩波書店、1998年、52-59頁。

⁶² Michael Hardt and Antonio Negri, *EMPIRE*, Harvard University Press, 2000 (水嶋一憲他訳『〈帝国〉——グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』以文社、2003年) .

⁶³ Berger and Luckmann, *op. cit.*, Note3- 40, p. 233 (312頁および264-265頁も参照のこと) .

⁶⁴ E. Laclau, *New Reflections on the Revolution of Our Time*, Verso: London, 1990.

⁶⁵ ヨーロッパ・アイデンティティをめぐる文脈においてしばしば異質な他者として表象されるのがイスラームやトルコを含むthe Eastであることは多くの研究者の指摘するところである。Iver B. Neumann, *Uses of the Other: «the East in European Identity Formation»*, University of Minnesota Press, 1999. Olivier Mongin, “Vers une fin de«L’exceptionnalité Musulmane»?,” *ESPRI*, 239, janvier 1998, pp. 5-9. Olivier Roy, “Naissance d’un islam européen,” *ESPRI*, 239, Janvier 1998, pp. 10-35. Laurent Licata and Olivier Klein, “Does European Citizenship Breed Xenophobia?: European Identification as a Predictor of Intolerance Towards Immigrants,” *Journal of Community and Applied Social Psychology*, 12, 2002, pp. 323-337.

⁶⁶ 特に18世紀以降は「ヨーロッパ」という枠組が社会的現実と考えられ、多くの思想家たちがそれを準拠枠として平和を構想していた。詳細は、拙稿「リアリティとしての『ヨーロッパ』とヨーロッパ統合思想——サン＝ピエール、ルソー、サン＝シモンを中心に」『創価大学大学院紀要』第25集、2004年、221-237頁で論じた。

⁶⁷ Dankwart A. Rustow, “Nation,” *International Encyclopedia of the Social Sciences*, Macmillan: New York, 1968.

⁶⁸ 事実、ヨーロッパ・アイデンティティの形成と浸透というEUの新たな挑戦は、次第に市民の心のなかに浸透しはじめている。詳細は、拙稿「ヨーロッパ統合と『ヨーロッパ・アイデンティティ』——『下』から見た『ヨーロッパ・アイデンティティ』」『創価大学大学院紀要』第23集、2002年、165-180頁で論じた。

⁶⁹ 拡大については、たとえば、Peter Mair and Jan Zielonka eds., *The Enlarged European Union: Diversity and Adaptation*, Frank Cass: London, 2002, あるいは羽場久シ尾子『拡大ヨーロッパの挑戦——アメリカに並ぶ多面的パワーとなるか』中公新書、2005年などを参照されたい。

⁷⁰ Günter Verheugen, “POINT DE VUE: L’Europe s’élargit ? Non, elle se retrouve”, *Le Monde*, 25 Novembre 2003, <http://www.lemonde.fr/web/article/0,1-0@2-3232,36-343261,0.html> (2003年11月27日閲覧) .

⁷¹ Christopher Dawson, *The Making of Europe*, Sheed & Ward: London, 1935 (野口啓祐、草深武、熊倉庸介訳『ヨーロッパの形成——ヨーロッパ統一史叙説』創文社、1988年) .

⁷² ピエール・ルジャンドル (森元庸介訳) 『西洋が西洋について見ないでいること——法・言語・イメージ〈日本講演集〉』以文社、2004年、30頁。